

ればならないとされている。

一般廃棄物のうち、ごみ（粗大ごみを含む。）の総排出量は、平成 12 年度は年間 534 千トンで、平成 11 年度と比較すると約 1 千トン増加している。

また、平成 12 年度のし尿（浄化槽汚泥を含む。）の総排出量は、年間 342 千キロリットルで、平成 11 年度と比較すると約 13 千キロリットルの減少となっている。

一方、産業廃棄物については、平成 10 年度調査によると平成 9 年中の県内からの発生量は、推計で 1,492 千トンとなっており、業種別では、電気・水道業が最も多く 495 千トン（全体の約 33 %）、続いて建設業 343 千トン（同約 23 %）、製造業 308 千トン（同約 21 %）、農業 271 千トン（同約 18 %）となっている。

第 3 節 自然条件の概況

第 1 地形及び地質の状況

本県は、地質構造からみると、紀の川（吉野川）にほぼ沿って県の中央部を東西に横断する中央構造線により大きく二分される。

北側は、西南日本の内帯に属し、花崗岩類や火山岩類からなる山地と盆地から構成されている。特に、北半分は南北方向に延びる活断層を反映し、高地・低地・高地が東西に並んだ地形配置を示している。構造の主方向が近畿地方中央部に卓越する南北性となるので、花崗岩類からなる山地は、全般に小起伏な稜線と断層崖である急斜面とのコントラストが明瞭である。大別すると生駒山地・奈良盆地・大和高原からなっている。

南側は、西南日本の外帯にあたり紀伊山地が分布している。地質構造は、帯状を示し、北より南へ三波川帯・秩父帯・日高帯が存在している。地質構造に沿う東西方向の谷は相対的に規模が小さく、ドーム状に隆起している紀伊山地の地形特性を反映して、新宮川や紀の川（吉野川）の本支流が広い集水域を占めている。この地帯は、全般に急斜面を巡らせた大起伏壮年山地であり、県総面積の 60 % 以上を占めており、中央部には十津川等の深い V 字渓谷に挟まれた近畿の屋根と称される大峰山脈、その東には大台ヶ原を中心とする台高山脈、西に伯母子山地が連なっている。

本県における貴重な地形等としては、曽爾村の屏風岩・兜岩・鎧岩（国天然記念物）、大台ヶ原、室生火山岩類の山容群、瀨八丁（国指定特別名勝・天然記念物）、鍾乳洞、深いせん入蛇行が発達した紀伊山地などがある。

活断層は、主に北部地域に分布密度が高く、顕著なものとしては、春日断層崖下に並走するものや矢田丘陵等を南北に走るものがある。西南日本を縦断する第一級の活断層である中央構造線が紀の川（吉野川）の北側を沿うように東西に走っているが、県東部付近での現在の活動度は極めて低いとされている。

また、県土の 8 割を山地部が占めているため、扇状地・谷底平野・崖地などの土砂災害を受けやすい地域が多い。

急峻な山容や深い渓谷、特色ある崖や滝など変化に富んだ県土や学術上貴重な地形等は、本県の特徴的な景観を形成する基本的な要素となっている。

図1 奈良県の地形



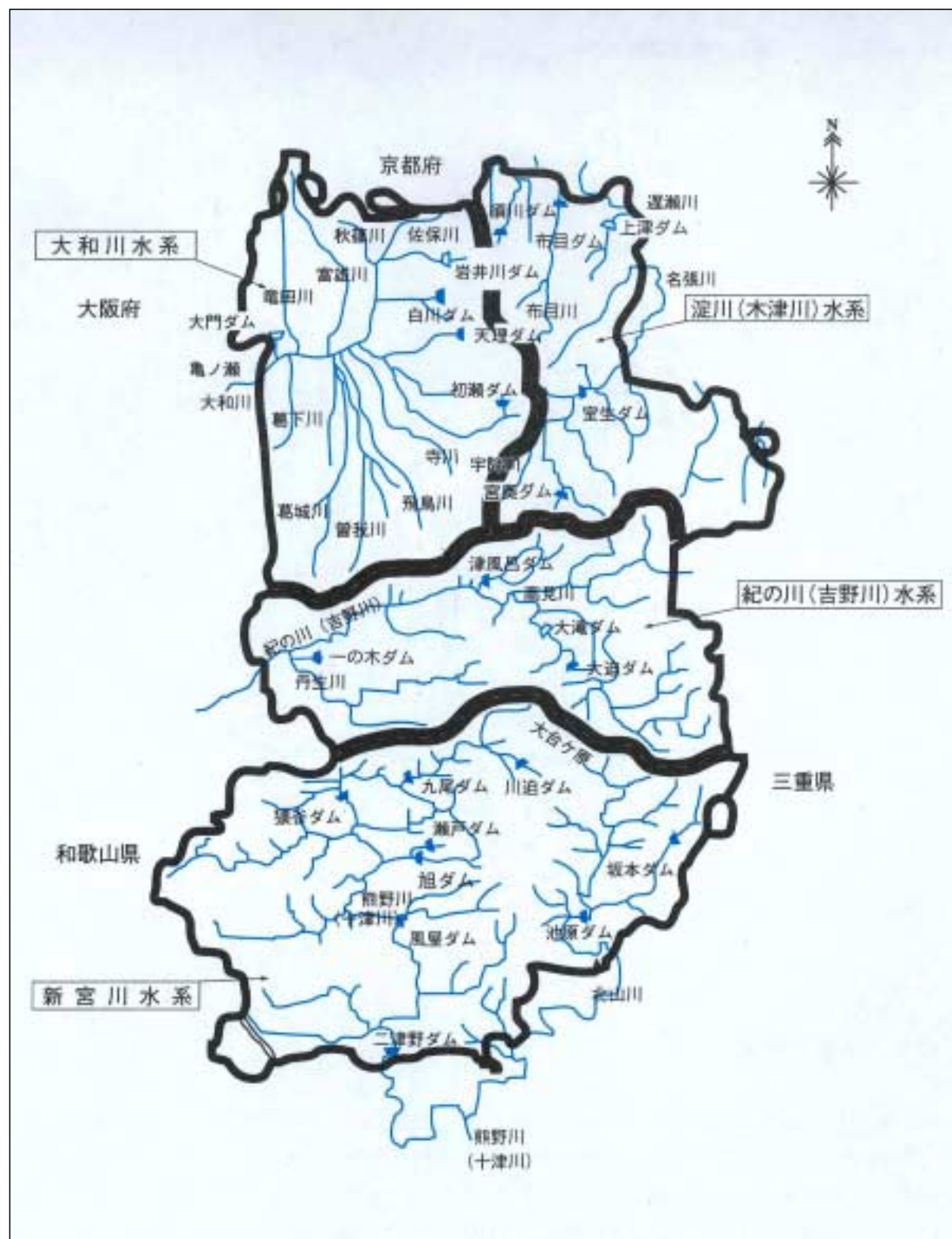
第2 水系の状況

本県の水系は、北部低地域を流域にもつ大和川水系、東部高原地帯を流域にもつ淀川（木津川）水系、県の中央から山岳地帯の北川部分を流域にもつ紀の川（吉野川）水系、南部山岳地帯を流域にもつ新宮川水系の四水系に大別される。

これらの水系は、いずれも一級水系であり、それぞれの一級河川数は、大和川水系 158 河川、淀川（木津川）水系 72 河川、紀の川（吉野川）水系 72 河川、新宮川水系 56 河川となっている。

図2 奈良県の水系

(平成14年3月1日現在)



本県は、海をもたない内陆県であり、これらの河川は、生活用水としてだけでなく、水域を生育・生息の場としている多くの動植物にとっても重要なものとなっている。

表2 河川の管理状況

(平成14年3月31日現在)

水系名	国管理河川	県管理河川		準用河川		備 考
	延長	河川数	延長	河川数	延長	
淀 川	36.5 ^{km}	72	252.3 ^{km}	38	56.2 ^{km}	準用河川とは、河川法が準用される市町村管理河川である。 新宮川水系の準用河川には、二級水系の日高川水系5河川(5.8km)及び日置川水系2河川(4.8km)を含む。
大和川	22.6	158	570.0	59	67.1	
紀の川	27.5	72	327.5	31	77.0	
新宮川	10.9	56	402.7	154	212.6	
合 計	97.5	358	1,552.5	282	412.9	

第3 土壌の状況

本県における山地（高原を含む）・丘陵地・台地・低地の土壌は、8土壌群（17土壌統群）に分類される。

山地及び丘陵地の土壌（林地土壌）のうち、約98%が褐色森林土で占められている。その他、火山灰に由来する黒ボク土、気象条件の影響を強く受けて生成されたボゾドル、赤黄色土、岩石地などがみられる。褐色森林土の大まかな分布は、県のほぼ中央を流れる紀の川（吉野川）を境として、分類できる。

北部の丘陵地・低山地に、乾性褐色森林土壌や黄褐色系乾性褐色森林土壌が広く分布している。特に、北西部は、生産力の低い黄褐色系乾性褐色森林土壌で覆われている。

南部は、起伏量の大きい壮年期地形をなしており、長大な山腹斜面に適潤な乾性褐色森林土壌が広範囲に分布し、スギ・ヒノキの造林地が多く、林業上の重要な地域になっている。

台地及び低地の土壌（農地土壌）をみると、概ね灰色低地土壌が多く分布しており、大和川とその支流沿岸の低湿地にグライ土が、竜門山地地域の一部に褐色低地土壌がみられる。

第4 気象の状況

本県の気候は、地形と同様に、北部と南部で大きく差がある。

北部地帯は、一般に温暖小雨であり、平均気温は15℃前後、年間降水量は1,400mm程度である。特に、周囲を山に囲まれた奈良盆地では、夏は暑く、冬は寒いという、典型的な盆地気候である。また、東側の大和高原・宇陀山地などの山岳地帯は平均気温12℃前後と低く、年間降水量も1,500mm程度となっている。

南部地帯を占める五條・吉野地域のうち、紀伊山地は、山岳性気候であり、平均気温も6℃前後と低く、全国的にも屈指の多雨地帯となっている。中でも、三重県との境に位置する大台ヶ原一帯は、年間降水量4,000mmを越え、鹿児島県屋久島などとともに、我が国の最多雨地帯である。また、最南端に近づくにつれて、太平洋の影響を受け、平均気温も北部地帯にほぼ近くなり、比較的温暖な多雨地帯となる。